慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	公債の弊害
Sub Title	
Author	星野, 勉三
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.2 (1913. 4) ,p.289(73)- 298(82)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130422-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

公債の弊害

星野勉三

一

經濟學說は皆其時代の反響にして決して普く古今に適用し得るものある可からず、保護と稱し自由と稱すが如きは全く相容れざるの觀ありと雖も兩者共に眞理にして、保護說の盛んなる時と處とに於ては、人々皆保護の必要を感ずるが爲めに遂に學說として此の如きものを生ずる所以にして、又自由說の盛んなるも此理に外ならざるなり、されば同一の國と雖も往古產業甚だ幼稚にして到底自國の產物を以て自國の需要を滿足し得る見込なき時代にありては、成る可く安く外國品を買ふを以て利益なりとするが故に貿易の自由を主張す可く、其後自國の產業發達して漸く國內の需要を滿足し得るに至たれば、外國品の侵入は國內の產業に對して大打擊となる可きが故に、之れを排斥せんとして保護貿易說を生ず可く、又國內の產業大に發達して外國に迄供給を試みんとするに當たりては、外國が關稅を

設けて之れを防止するは自國に對して大に不利益なる可きが故に茲に自由貿易説を生ず可し、此の如く時と、處を異にせば其經濟事情を異にするが故に又異れる學説の生ずは自然の勢にして、一を絶對の眞理となし他を採るに足らざる謬見となすが如きは決して當を得たるものにあらざるなり。

余輩は茲に公債の弊害を説かんと欲すれども強ち公債を以て寸毫の利益もなきものなりと云ふにはあらず、例へば國の存亡に關する大事件の生せる場合に於て、之を所決す可き資金を供給し得るが如きは公債に依らずんば能はざるものにして、又現代の國民が負擔し能はざる大支出を將來の國民をして分擔せしむるが如きも亦公債の功なる可く、特に外債の如きに至たりては外國より資本を吸收するは勿論、又利害關係上外國に對して平和を持續せしむるの効ある可し、然りと雖も此の如き大利益あるものは又其運用の如何に依りては大弊害の存する事を忘る可からず。

日清日露の兩役に當たりては、公債に依るにあらずんば我國家はよく獨立を維持すること能はざりしが故に、其募集は誠に已むを得ざる事にして、輿論の指導者たる可き者はよく其利益を研究して之れを國民に示すの要ありしと雖も、現今に於ては最早募集の時期を經過して整理の時期に入りたるに、未だ著しき成績の見る可きものなく、其借替の如きも經濟界の實際に適せざる不自然なるものにして、却て債權者を苦しむるの結果となり、又近き將來に於ては利拂の爲めに募債せざる可からずとせば、公債の光明面を紹介するの時期は既に去りて其暗黑面を指摘せざる可からざるの時期に入りたるものにして、余輩が本論を試みんとするは又此趣旨に外ならざるなり。

二

個人主義者は國家を以て無能なるものなりとして其活動に反對し、國家が財を使用するが如きは之れを破壞するに過ぎずとの説を爲すと雖も、余輩は此の如き言を信ずる者にあらず、官吏なる地位は國民の多數の希望する所にして、主義を曲げ節を屈して迄も之れを獲得せんと勉むる者ある有樣なれば、之れを得る者は多く他よりも秀でたる者なる可きは理の當然にして、此輩は財を破壞する者なりと云ふが如きは吾人の信じ能はざる所なり、故に公債も戰爭を行ひ又は公益に大關

係ある生産事業を行ふが爲めに此輩をして使用せしむるは頗る可なりと雖も、彼等は其支出に對して利害關係を有する者にあらず、故に先きに述べたる範圍を越へて財の處分を彼等に依托するが如きは頗る不利益なるものなりと云はざる可からず、換言すれば自己の財産を管理するに當たりては、何人と雖も充分なる誠意を以て之れに當たる可く、無責任なる支出をなさば自己の損失となり、又物品を買入るゝに當たりて故らに買直を高くして其一部分を口錢として取るが如きは、結局プラス、マイナスとなるが故に、精神病者にあらざる限りは此の如き愚を演せざる可しと雖も、其支出に對して直接の利害關係なき者に至たりては假令智あり才ありと雖も誠意少きが故に此の如き擧動を敢てする事往々之れあるなり。

されば公債は己むを得ざる程度を越ゆれば却て資本を破壞するに過ぎず、抑も國民の幸福は資本の多寡と關係する所頗る大なるものあり、若し資本少しとせんか經濟的なる機械を買入るゝに由なきが故に貴重なる勞力を浪費するの恐れある可く、又は原料を充分に買入るゝ事能はずして勞働を中止せざる可からざる事もある可く、又は資金の必要に迫られて捨賣をなすの已むを得ざるに至る事もある可く、又は高利借金の爲めに利益の大部分を奪ひ去らるゝ事もある可し、要するに資本少き時は、利率を高め資本家の配當を多くするが故に起業家の手に殘る所少なく、以て事業の發生を沮害するに至たる可く、又資本家とても其所有する資本の額は少きが故に假令利率高しとするも結局其收入は少なかる可く、勞働者は又勞銀を減せらるゝ事となる可し、之れ資本多く事業盛んに起こりて勞力の需要を喚起し、又は精工なる機械を備付けて勞働の效果を多からしむるにあらずんば勞銀は騰貴し得ざればなり、又地主は如何と云ふに地價下落の爲めに苦しむに至る可し、之れ資本少なき時は土地の如き利益なき物を買入るゝ人なかる可きが故に需要の減少は其價格を下落せしむる事となる可く、又國民の資力減ずる時は農産物に對する需要も減少し土地の利益は隨て減少す可ければなり。

之れを以て資本減少の結果として生産關係者が如何なる打擊を蒙むるやを見たれども、公債が生産に及ぼす惡影響は之れを以て盡きたりと云ふ可からず、其利拂又は償還を行はんとせば之れが財源として租稅を徵收せざる可からず、而して間接消費稅の如きは之れを徵收せんとせば生産費を增加して競爭を困難ならし

むるは勿論、又脱税を防がんとして種々の監督を施すが爲めに生産者は種々の不便を感ず可く、又重税は當然脱税を誘起するが故に公債の壓迫は納税者をして罪惡を犯さしむるに至る事ある可し、加之ならず生産費の増加が輸出貿易を困難ならしむる事は明らかにして、此の如き弊害は戻税又は輸出奬勵金等の制度に依りて除く事を得と云ふ者ある可しと雖も、實は只多少緩和し得るのみにして決して全然之れを除去し得可きものにあらず、結局障害を蒙むる事となるなり。

三

公債の存在は又分配の方面に於て大なる不利益あり、即はち公債を所有する者は全然爲す所なくして收入を得る者なれば、公債は無用の人物を造るものなりと云ふ事を得可し、此等公債の所有者を以て之れを無爲の大地主に比較する者あり、尤も大地主の存在は必ずしも憂ふ可きものにあらず、農事改良の試驗の如きは資力ある彼等にあらずんば能はざる所なるが故に、彼等が指導者となりて其模範を示す時は小農夫は無報酬の教師を得る事となりて又改良を行ふ可く、大地主の存在は却て農業界を益する事大なりと雖も、若し彼等にして其收入の多きに乘じて

贅澤のみを事とし他に爲す所なくんば、此の如き人の存在は社會の爲めに甚だ不利益なる可きなり、而して公債の所有者は資金を他人に托して自から何事をも爲さゞる者にして、若し何事をか爲すとするも其資金を他人に托せざれば尚より多くを爲す可かりし筈の者なるが故に此の如き輩は之れを從來非難の目標となれる無爲の大地主と比較するも決して不當にあらざるなり。

無用なる人物は只之れのみに止まらず、公債の事務に從事する官吏の如き、又は公債の利拂償還等に使用す可き資金を徴收する税吏の如きは、公債無くんば其必要なき者にして、之れに要する俸給乃至官廳の諸費用の如きは又無用と評せざる可からざるなり、此の如く無用の人物、無用の出費を要するが爲めに公債は強ち安きものにあらず、即はち債權者の受取る所は其元金と利息とに過ぎざれども、債務者の支出する所は只々之れのみならず茲に述べたるが如き種々の項目を存するが故に公債の負擔者たる國民は只々元金と利子のみならず、其他種々の支出を辯ず可き金額を租税として支拂ふの已むを得ざるに至るなり。

巨額の資金を公債として吸收する時は又貧富の懸隔を甚だしからしむるの結果を生ずるに至る可し、卽はち公債として資本を徵收する時は利率の騰貴を來たすは明らかにして、此の騰貴したる事に重利法を應用せば大資本は速かに增加すれども、小資本增加の速力は之れに比して甚だ遲き理なり、然らば此の輩は容易に大資本家となる事を得ざれども大資本家は益々其大を加へ、茲に其懸隔は益々甚だしかる可きなり。

資本の增加は甚だ喜ぶ可き現象なりと雖も、少數の大資本家の生ずるは全國に於ける資本の增加を意味するにあらずして、只少數者の手に集中する所以なれば、國民經濟は之れに依りて何等の利益を享くるものにあらず、故に全國に於ける資本の額多くして利率低落せば起業家は容易に之れを使用する事を得て國民は之が爲めに大なる恩典に浴する理なれども、少數者の手に集中するは却て其利用を妨ぐるに過ぎざるなり。

五

有價證券は他の商品に比して相場の變動著しく、時としては變動の原因存せるにあらず、只此の如き原因の生せんかてふ顧慮あるのみにて相場の變動を來たすものなれば、公債は其所有者の資產を不安全ならしむるものなりと云ふ事を得可し、尤も公債の所有者は之を賣り拂はずして只利子のみを得んとせば、其償還期に至る迄は何十年なりとも約定の額を得るが故に全然痛痒を感せざる可く、他の割引等を行ふ資本家が利率の下落と共に直ちに打擊を蒙むるに比すれば甚だ有利なるが如くなれども、公債を賣り拂はんとするに當りては其下落は大損害を來たす事となる可し、而して公債は他の商品に比して賣買讓渡の行はるゝ事頗る頻繁なるが故に、其下落に依りて損害を蒙むる者も亦頗る多き理なり、尤も國家の信用は不變なる可きものなれば公債の相場の如きも又少くとも內國の市場に於ては變動せざる筈なれども、市場の利率の變動に依りて又多少の變動を免れざるなり、卽はち利率高くんば人々皆公債を所有する事を欲せざる可きが故に其相場は多少下落す可く、又利率安くんば反對の結果を生ずるなり。

六

此の如く觀じ來たれば公債の弊害は亦實に恐る可きものにして、決して之に對

して「ドーツエル」派の學者の如く樂觀的態度を採る可きにあらず、尤も租稅と云ひ公債と云ひ皆各々大なる缺點を有し、只利益の之れに勝る場合にのみ利用す可きものにして、戰費の如き確實なる利益の生ずる見込無き支出を支辨したる公債に對して眞の整理を行はず、又遂に遣り繰りの爲めに之を利用せんとするに至りては其弊害のみを現出するに過ぎず、而して國民が之れに慣るれば遂に其害を疑はざるに至る可きが故に、屢々之れを警告するは亦無用の業にあらざる可きなり。

CONSTITUTIONAL PROGRESS IN JAPAN.

W. W. McLAREN.

Politically, history repeats itself in Japan. In 1897 the year closed with the downfall of the Matsukata Ministry and the dissolution of the Diet. The resignation of the government followed immediately upon a vote of want of confidence adopted in the Lower House on December 25th. In a country governed under a party system, the resignation of a Ministry means the transference of office to the opposition, but in Japan nothing of the sort happens, owing to the existence of the clan system. On the 12th of January, Marquis Ito formed a Ministry and awaited the general election, which occured on the 5th of March. The Diet met on the 14th of May and the government found itself with no adequate support in the House of Representatives. As a consequence the most important government bill of the session, the Increased Land Taxation Bill, was thrown out by a vote of 247 to 27. The House was once more dissolved. This action so enraged the Opposition parties that it was possible to effect a combination of all the elements opposed to the